

精神界を動かすテコとしての肉体

——ホフマンの『隠者ゼラーピオン』に見られる「ゼラーピオンの原理」について——

梅 内 幸 信

第一節 『幻想画集』——「カロー風の様式」——

ホフマンは、その大半の作品を燃えるようなインスピレーションにまかせて書き上げ、何度も原稿を書き直して推敲するということとは、めつたにしなかつた。¹⁾とはいつても、彼が完全にインスピレーションに身をまかせて、詩的效果を考えずに創作したかという点、それもまた、正鵠を射た解釈ではない。確かに、ホフマンは、彼の文学において体系的な芸術論というものは展開していないが、個々の作品において、断片的ながら、彼の詩法に関する考えを垣間見せている。彼の詩法に関する考えは、主に三つの作品集において展開されていると考えられる。それは、時代順に列举すると、『幻想画集』と『夜景画集』、そしてとりわけ、粹物語の形式を採っている『ゼラーピオン同人集』である。前者二つの作品集は、『Fantasiestücke』ならびに『Nachstücke』という原語のタイトルからも分かるように、ホフマンは、この『Stück』というドイツ語を「絵画」の同義語として用いている。²⁾ホフマンは、本来法律家であったが、周知のように、同時に、作家として作曲家でもあり、さらには、素描家でもあった。実際、彼は、自画像やクンツの子どもたちの絵ばかりではなく、自

精神界を動かすテコとしての肉体

作の『ちび助ツアヘス』や『よその子』といった童話のためにその扉の絵を自分で描いている。

『幻想画集』には「カロリーの様式」という副題が付けられていることから分かるように、作品集全体は、カロリーの様式に倣って作り上げられている。ホフマンのカロリーの様式に対する傾倒は、彼が作品集第一巻の冒頭において、次のようなカロリーへの賛辞を述べていることから十分に理解される。

「どうして私は、あなたの一風変った幻想的な絵を何枚となくめぐりながらも見飽きるということがないのでしょうか。果敢なる巨匠よ！——一体どうして、あなたの描いた様々な姿形すがたかたちが、しばしばそれらは、ほんの数本の大胆な線だけでもって暗示されているに過ぎないのに、私の脳裏から離れないのでしょうか。——この上もなく異質な要素から創りだされたあなたの極めて豊富な絵の構図を眺めると、その何千もの人物像の一つ一つが、しばしばそれらを見つけたすことすら、いよいよもってむずかしい彼方の奥深い背景から、力強く、なおかつ、この上もなく自然な色彩に包まれて、光り輝きながら歩み出てくるのです。」(FN, S.12)

カロリーの作風は、端的に言うところ、強靱な線でもって、対象の奥底に潜む実体ないしは本質を生き生きと観衆の眼前に描きだすことにある。⁽³⁾しかも、その対象は、単に実在のものばかりではなく、時空を超えた過去や未来の存在をも含んでいる。ホフマンは、その処女作と言われる『騎士グルック』では、二〇年以上も前に亡くなっている作曲家グルックを、ホフマンの生きている一八〇九年に蘇らせている。

同じ作品集の第三巻として一八一四年に出版された『黄金の壺』は、自他共に認める初期の傑作と言えるものであった。この作品においてホフマンは、グロテスク様式を用いながら、「醜いもの」の復権を主張することによって、読者に「新

しい認識」を迫ると同時に、新たなビジョンを提出している。⁽⁴⁾ 主人公のアンゼルムスは、世俗の誘惑に駆られ、真実の世界であるポエジーの世界を忘れ、またそれと同時に、本当の恋人であるゼルペンティーナを見失いかける。しかしながら彼は、「認識の産婆」である文書管理役リントホルストの導きによって、様々な試練を克服し、最終的には理想郷アトランティスにおいてゼルペンティーナと結ばれるのである。

第二節 『夜景画集』——明暗の手法——

続く『夜景画集』においてもホフマンは、絵画の技法を文学に転用する試みを行なっている。それは、この作品集第一巻冒頭の作品である『砂男』において、すでに如実に現れている。ホフマンは、ジャック・オッフエンバック (Jacques Offenbach, 1819-80) のオペラ『ホフマン物語』によって世界的に有名になったこの作品を、「一八一五年一月一六日、夜一時」(FN, S.794) に着手し、同じ月に完成してゲオルク・ライマー社から出版している。この経緯は、すでに『砂男』の内容と手法を象徴的に暗示している。「夜景画」は、本来絵画の分野における用語であり、これはローソク、ランプ、松明等を用いて「一つの対象の、夜の闇にあつてまだ光に当たらずに残っている部分に人工的な照明を与えて、効果をあげる」⁽⁵⁾ 手法であつた。この明暗の手法は、『砂男』にも応用されている。ホフマンは、光学器械や自動機械人形のモチーフを巧みに用いながら、外面世界と内面世界、すなわち光の当たった明るい市民の世界と光の当てられていない芸術家の暗い狂気の世界を対照的に併置しつつ、しかも、その両世界の境界線をぼかし、その両世界における事件や現象に微妙な陰影をつけようと試みている。

『幻想画集』にしても、また、『夜景画集』にしても、その眼目は、作者ホフマンの内奥に「立ち昇る幻想を、読者の

眼前に生き生きと描きだすこと」にある。しかしながら、この二つの作品集を考察するとき、カロリーの様式ならびに明暗の手法によって書き上げられた作品群には、未だ重大な欠陥があると云わざるをえない。それは、結末の曖昧さ、あるいは不完全性となって現れている。例えば、『黄金の壺』の末尾では、作者ホフマン自身の嘆きが描かれるし、また、『砂男』の主人公ナターエールは、狂気に陥って破滅する。もちろん、人間のもつ「夜の側面」ないしは「無意識のデモーニッシュな脅威」を描こうとするとき、主人公の破滅も避けられないであろう。しかし、少なくともホフマンの場合、主人公の破滅は、同時に、ホフマンの詩法の欠陥を暗示しているように思われてならない。

第三節 『ゼラーピオン同人集』——「ゼラーピオンの原理」——

ホフマンの詩法という観点から見ると、主人公の破滅という点で、最も興味深い作品は、『ゼラーピオン同人集』の冒頭に収められている『隠者ゼラーピオン』という作品である。この作品集は、ホフマンの最後にして最大の作品集というばかりではなく、彼の最終的な詩法が完成される作品集である。ここで提出されている「ゼラーピオンの原理」は、ホフマン文学最大の傑作と言える『ブランビラ王女』となって、大輪の花を咲かせることとなる。一八二〇年一月二四日、ホフマンは、四四歳の誕生日に当たって、ゼラーピオン同人の一人である医師ダーフィット・フェルデイナント・コレフ(David Ferdinand Koreff, 1783-1851)からフランスの芸術家ジャック・カロ(Jacques Callot, 1592-1635)の手になる銅版画集「スフェサニアの舞踏」(Balli di Sfessania)を贈られる。このことが、ホフマンが『ブランビラ王女』を書く直接の契機になっており、同時にまた、カロの様式はこの作品の基盤ともなっている。このように、ホフマンの詩法は、カロの様式から出発して、再びカロの様式に戻ってきている。しかしながら、それは堂々めぐりではなく、明確に

弁証法的発展を遂げている。つまり、単純化すると、『幻想画集』と『夜景画集』は現実に対するアンチテーゼの詩法を提出しており、『ゼラーピオン同人集』はジンテーゼの詩法を提出し、この精華が『ブランビラ王女』であると考えられるのである。ここに至って完成したと思われる「ゼラーピオンの原理」とは、イルゼ・ヴィンターが分析しているように、「表現の良いまろみ」「活力のある表現」「神秘化」の三点に集約することも可能であろう。

第四節 隠者ゼラーピオンの詩的狂気

『隠者ゼラーピオン』の物語を語るのは、同人の一人であるチュプリアーンである。B町から二時間と離れていない所に、「ゼラーピオン司祭」と呼ばれる隠者が住んでいるが、彼はもともと名家の出身であり、広い教養を身に付け、ある重要な外交上の仕事に就き、そこで勤勉に働き、出世もした人間であった。しかも、「種々の知識を卓越した詩的才能と結合していたので、彼の書くものはすべて、炎と燃えるごときファンタジー、事物の奥の奥まで見抜く格別な精神に満ちあふれていた」(SB, S.19)と言われる。この人物が、ある日突然姿をくらまし、その後しばらくして、チロールの奥深い山岳地帯で村から村へと説教して歩く修道士として現れるのである。一旦は、その凶暴性のためにゼラーピオンは、B町の瘋癲病院へ収容されるが、病院長の治療法が効を奏し、「狂乱状態」(SB, S.19)からは救い出されることとなる。しかし、彼が病院を脱走してB町から二時間ばかり離れた森の中に住むようになってからは、保護観察の下に森の中に住むことが容認されるのである。

ゼラーピオンは、森の中に庵をしつらえ、小さな庭を作り、そこに野菜や草花を植えて、隠者の生活を営んでいる。ところが彼は、「自分がデーキウス皇帝の圧政下にあつてテーバイの荒野へと逃げ、アレクサンドリアで殉教の死を遂げた

隠者ゼラーピオンであると」(SB, S.20) 考えているのである。チュプリアーンは、ゼラーピオンの「固定観念の原因」(SB, S.20) を突き止めようとする。チュプリアーンは、森の中に住んでいるゼラーピオンを訪ね、彼をその固定観念から解き放つべく、説得に努める。その間彼は、「……」修道院長のモラーヌスという人は、なにごとにつけ大変理性的に話をする人であったが、自分を一粒の麦だと思い込んだために、たちまち鶏たちに食べられてしまうのではないかと心配で、自分の部屋から外に出られなくなってしまった」(SB, S.22) というエピソードを思い出したり、「自分の自我を歴史上のある人物と取り違えるということが、固定観念として内面で形成されることは、実際よくあることだ」(SB, S.22) と考えたりする。挙げ句の果てに彼は、「これ以上狂っているというか、トンチンカンな話はないね。B町からわずか二時間ばかりしか離れていない上に、毎日とにかく農夫や狩人や、旅人や散歩の人やらが歩きまわっている小さな森をテーバイの荒野だと思い込み、自分自身を何百年も前に殉教の死を遂げたと同じ熱狂的な聖人だと見なしているんだから」と考え、腹が立つてくる。しかし、名案も思い浮かばないうちに、ついに、チュプリアーンは、「……」P伯爵、あなたを魅惑し、あなたの身を滅ぼす夢から目を醒まして下さい。【……】」(SB, S.22) と呼びかける。ところが、ゼラーピオンの方は、落ち着いて、「……」失礼ながら、ここで一言二言お応えいたします。聖アントーニウスを初めとし、世俗から身を引いて孤独な生活へと引き籠もった教会の人々は皆、頻繁に厭わしい幽鬼に襲われるという試練を受けたものです」(SB, S.23) と応える。それどころか彼は、一見理路整然とした論理でもって反論し、「……」さしあたり、なにはともあれ、時間というものは、数と同様、相対的概念なのです。私が私の中にもっている時間概念に従いますと、デーキウス皇帝がこの私を処刑させてから、ふだんあなたが時間の流れを測ろうとなさる程度にしか、つまり、三時間も経っちゃいないのです。【……】」(SB, S.23) と、まことしやかに主張する始末である。ゼラーピオンが、この森がB町から二時間ほどしか離れていないという証拠を見せて欲しいとチュプリアーンに要求するに及んで、チュプリアーンは、二時間も行

けばB町に出て、私が言うことが証明されるでしょうから、一緒に行きましょう、と提案する。これに対してゼラーピオンは、「——もしそこで、あなたの方こそ、救いがたい狂気にとりつかれ、テーバイの荒野を小さな森だと見なしたり、はるか彼方の遠いアレクサンドリアを南ドイツの町Bだと見なしたりしているのではないかと、こちらが言い張る番になったとしましたら、どうおっしゃることができらるでしょうかね」(SB, S.24)と反論するばかりである。ゼラーピオンは、確かに狂気に陥った人間なのであるが、しかし、驚いたことに彼は、別れ際に「[……]これでいて私も、毎日色んな大変珍しい方々の訪問を受けるんです。きのうは、アリオストが私のもとにきてくれました、その後まもなくダンテとペトラルカが続きましてね、今晚は、あの勇ましい神父エヴァーグリウスがくる予定になっています。きのうは詩の話をしましたから、きょうは教会の最近の出来事について話し合うつもりです」(SB, S.25-26)と言ひ添えるのである。続けてゼラーピオンは、彼の「より高き認識」(SB, S.26)について、こう述べる。

「[……]多くの人々は、そんなことは、やはり信じがたいことだと思い、私の精神、私の幻想の産物に過ぎないものを、私が外界の生活の中で実際に起こっているように思い込んでいるのだ、と考えたのです。こういう考え方を私は、この世にありうる最もばかばかしい屁理屈の一つだと思えます。私たちの身の周りの空間と時間の中で起こるものを把握することができらるもの、それは精神のみなのではないでしょうか。「[……]」ですから、私たちの前で起こる出来事を把握するのが精神のみであるとしましたら、精神がそれと承認するものが、やはり実際に起きていたということになるのです。[……]」(SB, S.26)

ゼラーピオンは、このような認識に基づいて、チュプリアーンに一つの短編小説を語るが、これは彼に「炎と燃え立つ

ファンタジーの才能を具え、才気あふれた類稀なる詩人にしかできないような構想力と実行力をもっている」(SB, S.26) という印象を与えるのである。ゼラーピオンの語りの切れ味の良さとものごとを良く見抜く悟性に感心しながら、チュプリアーンはゼラーピオンのもとを去るが、その後三年ばかりして再びゼラーピオンを森に訪ねると、ゼラーピオンは、すでに死んでしまっていたのであった。

第五節 精神界を動かすテコとしての肉体

チュプリアーンがこの物語を語り終えると、ロータルは、次のような見解を述べる。

「——哀れなゼラーピオンよ、あなたの狂気の実体は、なにか敵意をもった星が、もともと私たちの地上の存在を条件づけている二元性の認識をあなたから奪ってしまったところから生じていたに他ならないのです。内界というものがあって、これを完全に明瞭に、つまり、この上なく生き生きとした生命のもつ極めて完璧な輝きの中で眺める、精神の力というものもあるのです。とはいえ、私たちが組み込まれている他でもない外界が、テコとなって働き、その精神の力をも動かすのは、私たちの地上で受け継いだ遺産なのです。諸々の内的現象は、外的現象が私たちの周りに形作る圏内で立ち現れてくるものであって、精神は、曖昧で神秘的な予感となって、その圏内へと飛んで行けるに過ぎず、また、この予感にしても、決して明確なイメージとはならないのです。それなのに、ああ、隠者ゼラーピオンよ、あなたは外界を確定することもなく、また、隠されたテコを、あなたの内面に働きかける力を理解しなかったのです。見たり聞いたり感じたりするもの、行為や出来事を把握するもの、それはひたすら精神だけであり、従って、精神がその存

